



各事業所やフロアーに掲示

永 寿 会

虹の通信 第36号

2023年7月14日

～SDGs（持続可能な開発目標）の帳を開く～

今、人類の生存や人口増に伴う CO2 の爆発的増加で、カナダや南米大陸等で山火事が広がり、極地の氷山の崩壊で氷山も最少になっているとのこと、地球上の気候は急激に変わりつつあります。人は様々な人種に分れ、全世界に拡散・増殖し、長い間地上や海中に生存してきた動植物や魚類等を飽食しての結果と思います。世界的にもそのような認識が深まっており、その結果が2015年9月、150カ国の代表が参加した国連の「持続可能な開発サミット」で合意したのが SDGs です。17のゴール169のターゲット（具体目標）で構成され、2030年に向けて、各国が発展途上国を支援しながら努力を進めるとされています。日本はゴールのうち、16、4、9は達成しているが、5、12、13、14、15、17は進んでいない。何せランキングは19位であるから。アイスランドやデンマークなど北欧諸国はもの凄い努力をされており、皆さんもご存じの若き女性グレダ・トゥーンベリ（スウェーデン人）さんは15歳で気候変動問題のための学校ストライキを進めたからとも言えるでしょう。また、「変化をもたらすためには未熟すぎることなんて無い」と言っています。

永寿会でも10年程前から細やかな取り組みを始めておりました。施設厨房から出る調理残渣や廃棄残飯は通常は行政の清掃車両により可燃ゴミとして搬出され、処分場で重油をかけて焼却されていますが、こんなことで良いのかと考えて、堆肥場を決め、周辺の落ち葉や米糠、裁断した剪定枝等を攪拌して有機堆肥に利用しておりました。成果物は施設内緑地や保育園の野菜畑に散布して有効利用しておりましたが、堆肥場に投入するのが大変なことから、ここで静岡のメーカーが開発した「全自動式生ゴミ処理機」を設置して、今週から稼働を開始しました。脱炭素、ゼロカーボンへの道で、小さな歩みですが SDGs の実践の形になります。

有機堆肥は菜園に利用すると地力が付き様々な生物の活躍する場所として、ミミズや蜘蛛、カマキリ、蜂類の憩いの場、活躍の舞台にもなります。個人的にも実践している無農薬野菜栽培に役立って元気な夏野菜が育っています。

私達もその元気を貰わなくては。そして出来る一步の階段を登りましょう。